

アクティビストたるもの —言いたいことを言う自分を生きるために—

浅井 春夫
(立教大学名誉教授)

はじめに—いま、なぜ「アクティビスト」なのか—

アクティビストに問われること

社会運動家、政治活動家、改革主義者など……さまざまな呼び方がされてきたアクティビスト【activist】とは活動家という英語である。ここでいう「アクティビスト」とは、いかなる現実に対抗し、何をどのような方向に変えていこうと考えているかが問われる存在である。国民・子ども・高齢者・障がい者などの人びとの現実と課題を踏まえて、何を変えなくてはならないかを考え、政策批判、改革の具体的内容を提起するスタンスが問われている。

本稿ではあえて日本語を使わず、自由で偏見のない英語での表記を使うことにした。けっして「活動家」という本来の用語の意味を忌避しているわけではない。

小稿は、自らのアクティビストとしての歩みと学びをまとめ、自分自身の今後活かすために書いている。そのうえで私の個人的な運動の体験談を、それぞれの持ち場で社会的なとりくみに関わっている人たちに読んでいただければ望外のしあわせである。

私は研究者として自らを改革論者として位置づけてきたが、政権の中枢にいる政治家や政策スタッフである研究者のいう新自由主義に依拠した「改革派」ではない。そうした人たちからは、ときには「守旧派」（現状維持を望む保守派）などと揶揄されたこともあった。アクティビストにとって、古い・新しいは評価の基準ではない。いかなる現実に向きあい、何をだいに考え、変革を希求しているかが問われているのである。

本号では「アクティビスト」には何が問われ、どのような姿勢が求められているのかについて自由に論じてみたい。運動に関わる者は、運動をどう創っていくのかという課題を不断に問直しつづけることが求められる。しかし、このような基本姿勢が後退・荒廃をしている現実がしばしば見られるが、そうした実態は

“マンネリズム”ということばで表現されることが多い。だが、その言葉以上に深刻なことが少なくない。

学び方改革の5K

では、どのようにマンネリズムと運動主体の想像力の枯渇化に対抗できるのかを問うと、端的に言えば問題意識を持ち続けることであり、知的刺激を得るための方法をいくつも準備しておくことである。

なかでも最も問題・課題意識が醸成されるのは読書である。アクティビストの天敵は、読書離れである。いまアクティビストに問われている課題として、学び方改革としての「4K」をあげておきたい。①本の「購読」という学び、②講演や報告を「聴く」という学び、③は①、②の学びを言語化して「語る」という学び、④一段ギアをあげて「書く」という学びがある。研究的実践と実践的研究の結合スタイルを自分流に創造していくことが求められている。

そして、もうひとつの「K」として「行動」「活動」がある。①～④をおろそかにしては行動に結実することは乏しくなる。行動の原動力は問題意識であり、それがいびつで、自己存在証明のために行われている場合もある。確固とした信念を持ったアクティビストになるためには、①～④のすそ野を拡げる努力なしには具体化しないのである。

1. 私が運動にかかわりはじめたころ、そしていま

労働運動に貢献できる人間になりたいと思うことがあり、高校3年生になって龍谷大学法学部に絞って受験勉強をした。それは労働法学の泰斗である浅井清信教授がいたことが大きい。父がこういう人がいると紹介してくれたことも大きかった。関西風にいえば3・4回生で浅井ゼミに所属して、労働法を学び、卒論は「労働運動のなかの労働裁判の意義」を書いたことを覚えている。1回生の基礎ゼミ（クラス）で、高野史郎著『現代の貧困と社会保障』（汐文社、1970年）の「朝日訴訟」の章をレポートしたことが社会保障・社会福祉に関心をいただくきっかけとなった。幸運な学びの出会いであった。

私が運動に本格的に参加したのは大学に入学したときからである。学生寮で生活することになり、4人部屋の一員となった。それが私にとっての人生の転換点であった。

私のアクティビストとしての歩み

私の歩みを時系列で紹介しながら、その時代の課題に向きあったことをみておきたい。

- ① 龍谷大学東寮での「平民学会」（平和と民主主義を学ぶ会）を岩田和郎さ

んとともに立ち上げるようになった。岩田さんは、長崎の高校で教員となり、原爆瓦の発掘などを生徒とともに取り組んだ誠実な人である。若き日の魂は人生を貫いて生きることが多いのだ。

先輩たち数人とともに、学生寮で自治会を結成、あわせて全日本学生寮自治会連合（全寮連）にも加盟した。戦後の占領期にアメリカ進駐軍が使った宿舎を改造した100人定員の学生寮で、トイレは洋式を和式に改修したものであった。私の部屋は、寮運動のリーダーとなった2年生の坪井修さん、新入寮生の幡野利雄さん、吉富哲志さんであった。私のアクティビストとしての人生は龍大東寮（男子寮）101号室からはじまった。

- ② 龍谷大学法学部を卒業して、ボランティアサークルでの体験を通して福祉を学びたいと思うことがあって、日本福祉大学に3年次に編入した。ゼミでは社会福祉労働論の研究に取り組んだ。ゼミで培った問題意識から全国社会福祉系ゼミナール（全社ゼミ）のなかで「労働問題分科会」を創設。助言者は日本社会事業大学の鷺谷善教教授であった。
- ③ 就職した児童養護施設の調布学園で、全国福祉保育労働組合の中央執行委員長が専従として2年間職場を空けるので、代わりに職員として手伝うようにということで就職をさせてもらった。その施設で性的な問題が発生したことに端を発して性教育委員会を立ち上げることとなった。そのとき、吉祥女子中学・高校の副校長であった山本直英さんとの出会いがあって、“人間と性”教育研究協議会で研究活動を続けてきた。厳しい人であったが、リーダーのひとつの姿を学ぶ日々であった。
- ④ 数年の現場実践を踏まえて、都内の実践に足を踏み出している施設の仲間呼びかけて、“人間と性”教育研究協議会・児童養護施設サークルを結成した。春と秋には全国セミナーを開催し、『児童養護性教育ハンドブック』（全国児童養護施設協議会の研究奨励賞である松島賞を受賞）を出版するなどのとりくみをしてきた。
- ⑤ 1998年、立教大学コミュニティ福祉学部の創設の年に、関正勝・初代学部長の後押しもあって、学園祭「IVYフェスタ」実行委員会の立ち上げ、新生と教員・事務の方々とまさにならんで開催した。年度途中からの実行委員会の立ち上げだったので、予算はゼロで、教職員のカンパと学生たちが地域に出た学園祭パンフレットへの広告掲載・協賛カンパ集めでまかなった。1年生恐るべし！それでもさすがに新生に実行委員長はお願いできないので、教員である私が実行委員長となった。
- ⑥ 立教大学コミュニティ福祉学会（学内学会）の立ち上げ。福山清蔵学部長（3代目）に相談・提案し、やりましょう！と背中を押される。あわせて学内学会誌『まなびあい』を創刊（編集長を担当）。『まなびあい』の題字は故・

尾崎新先生に書いていただいた。

⑦ 児童養護施設からの入学生へのコミ福独自の「田中孝奨学金（児童養護）」「田中孝奨学金（震災）」の創設。田中孝氏の多大なご寄付と励まし、前・松尾哲文学部長の事前の準備と大学内への説得、平野方紹教授の要項の原案作成の尽力が結実し、教職員のみなさんの後押しのなかで学部独自の制度がつくられたのだった。感謝あるのみ！

⑧ 埼玉県の北部には児童養護施設は多くあるのだが、西部地域にはほとんどないので、児童養護施設を建設する準備会をつくり、役員スタッフ、土地まで確保し、設立申請を準備した。しかし周辺住民の2名の強固な反対と、定員は充足しており増設は必要ないというのが県の判断があった。実現できなかったソーシャル・アクションの経験である。現在まで児童養護施設の配置の偏在は改善されないままとまっている。

ただ、この設立運動にとりくんだ仲間たちが「NPO法人 学生支援ハウス ようこそ」の設立に合流していくことにもなった。運動はつながっていくのである。

⑨ 戦争孤児たちの戦後史研究会の結成と全3巻（吉川弘文館）の出版にとりくんだ。まさに手弁当の研究会で、心ある人たちが集まれば、いろいろなことができることをあらためて実感する日々であった。全国各地で巡回研究会を8回開催し、フィールドワークもしながらのとりにくみであった。『事典：太平洋戦争と子どもたち』も出版を予定している。

⑩ “人間と性”教育研究協議会・乳幼児の性と性教育サークルの結成。これは保育分野における残された挑戦的課題である「乳幼児期の性教育」を、各領域の現場実践者と保護者と研究者で運営している研究サークルである。

運動は、組織や団体を創ることが自己目的ではないが、あらためて想うことは、そうしたくみを創ることで、立ち上げた以降も少なくない人や子どもたちの人生を応援することができるということである。現在と未来をつなぐ役割がアクティビストにはある。

2. 運動を創るときにだいじなこと

「一隅（いちぐう）を照らす、これ則（すなわ）ち国宝なり」

最澄の「山家学生式（さんげがくしょうしき）」の仏教書に書かれている言葉である（けっして原著に当たっているわけではない）。アフガニスタンで活動をされてきた故・中村哲さんの生きざまに関わって使われることがよくある。多くの人たちが気づかないこと、スルーすることを自らの課題として捉えて、他者に評価されないなかで地道に取り組みを続けている人は、国の宝（仏を信じる心のこと）ということである。

アクティビストという存在にはそうした孤独な面も内包しているのであろう。ヒーローやヒロインにならなくてもいい。揺るぎない誠実さを持ち、社会の片隅でその人がいることで人々のしあわせに少しだけ関わられる努力を続けている人びとに、私は心からの敬意を抱く。

最近、永野三智（一般財団法人水俣病センター相思社常務理事、水俣病患者連合事務局長）著『みな、やっとの思いで坂をのぼる－水俣病患者相談のいま－』（ここから、2018年）を読んだ。患者相談を通して著者が感じたことが記述されている。その静かな怒りと真摯さとともに事実で貫かれた文章に圧倒される中身だった。二つの文章を紹介しておきたい。

「患者が持つ症状は、その人にしか分からないものが多いのです。だからこそ、私たち支援者も、医者も、行政も、彼らの苦しみへの想像力を、もっと持つ必要があると思うのです」（65頁）。相談活動から発せられた言葉である。

原田正純さん（水俣病の研究と患者救済に生涯をささげた医師。熊本大学退職後は、熊本学園大学社会福祉学部に勤務・退職。同大学退職2年後の2012年逝去）のことが同書で紹介されている。

「中立とは何か。多数派と少数派の中間に立って、強いものと弱いものの中間に立って、何が中立か。本当の中立とは少数者の側に立って実現する」（118頁）。亡くなる直前まで、水俣病の患者・被害者の側に立ち切って生きた人生であった。アクティビストは愚直に民衆の声に耳を傾ける姿のなかにあると思う。

政治・政党レベルでの思想ではなく、生身の人間に向かい合う思想がアクティビストには問われている。そして、政治レベルの思想として研ぎ澄まされる必然性がある。アクティビストには生身の政治学が必須の知性である。政治学を持たない研究者の体制化することがなんと多いことか。

アクティビストの発達を阻害し、あるいは発達をはぐくむ分岐点について、以下の表で整理しておく。「分岐の事項」は私の経験的指標である。

表) アクティビストの発達を阻害するもの、はぐくむもの 作成：浅井春夫

分岐の事項	発達を阻害するもの	発達をはぐくむもの
①新聞を読む	あまり目を通さなくなる	毎日、できれば複数の新聞に目を通す
②本を読む	ほとんど買わないし、読まない	週に何日かは本を読む日を決めていて、本を日常的に持ち歩いている
③本を買う	本代という考えがなくなっている	1ヶ月の本代がある程度は決めている
④社会問題への関心	社会の出来事に、それはどうして？という疑問が薄い	社会の動向や出来事に常に関心を持ち続けて、疑問や怒りを忘れないでいる
⑤日々の気づきをメモ・ノートする	“気づき”があまりなければ、メモすることもなし、発見もなくなる	多様な角度から、気づきをメモすることで関心を持ち続けることを大切にしている

⑥批判や異見に対しての許容力	批判的意見や問題提起に対して、謙虚に耳を傾けて、そうした意見を活動に取り込んでいく姿勢が乏しくなる	批判的意見、別の角度の意見や論理に、真摯に耳を傾け、活動の内容をより充実させていく姿勢を持ち続けている
⑦“弱き人々”への関心と共感	人間への関心が薄らぐ傾向にあり、とくに社会的に脆弱な立場にある人・階層への関心が薄れている	少数者の現実に着目することをだいきにしており、当事者の声を聴く努力をしている
⑧運動におけるジェンダー平等の感覚	男性の発言が長いのはよく聞いているが、女性の発言には違和感を持つ傾向がある	日頃あまり多く発言しない人の声や、勇気を持って発言したことに真摯に耳を傾ける姿勢を大切にしている
⑨家庭内のジェンダー平等を意識する	外では“活動家”でも、家では気遣いもない男に対して、そんな男を支える従順な女性のままとまっている	家事・育児に関して、柔軟に協力しあって共生関係を創っている。話し合いを大切に、お互いに対等な関係を形成している
⑩夢や希望を語る	否定的な現実に着目する傾向にあり、運動がすまないことへの自己弁護と他者への責任転嫁が多くなる	現状の否定面もきちんと捉えながら、中長期的展望をもって理論的に夢や希望を語る努力をしている

3. アクティビストの人格が問われる場面—私が運動のなかで気づき、反省すること—

私が運動に参加し経験したなかで、自分自身が試され問われる局面を取り上げてみたい。

若い人の運動への参加を考える

運動に関わっていると、「若い人が参加してくれない」「運動を担う若い層がない」といった声をよく聴くことがある。高齢の方が運営の中心を担う比率が多くなることの裏返しでもある。この現実には運動の側が共通して抱える課題である。

ただ私はこう思うのだ。高齢になっていくことで清新な気持ちと想像力が必然的に枯渇していく訳ではない。反対に若ければ、創造性に溢れた発想が充満しているわけでもない。運動の体験と学びは必要なことである。要はその体験をどう学ぶかにある。

「人を動かす新しい体験をつくらうとすると、人は『動かされた自分』の体験を基準にしてしか、それをつくることができない」。そしてその文章に続けて「未来を切り開くことと『自分が心を動かされたなにか』を継承し伝えることは同義だろう、とほくは思っている」と（若林恵のコラム集『さよなら未来—エディターズ・クロニクル 2010-2017』岩波書店、2018年、93頁）。

研究教育活動においても、社会的な運動においてリーダーに問われていることは、懇切丁寧な指導と助言もときには必要だが、自分自身が「心を動かされたなにか」をどう伝えるかがだいじなことではないかと思う。

言えることは、少なくともそこに権力的な上意下達関係が日常を覆っている状

況のなかでは、同意は成り立たない。そこにはさまざまなハラスメントが介在する落とし穴が待ち受けていることが多い。アカデミック・セクシュアルハラスメントは、指導関係という公的な指導的關係性を悪用・延長・拡大して、プライベートな関係にまで持ち込んでいる性暴力そのものである。同様に職場におけるセクシュアルハラスメントに関するあいまいで保身的な対応は、組織およびアクティビストの人権尊重と個人の尊厳に背くという点で思想崩壊を導くことになる。

運動において大切な視点は、自らが所属する団体や運動の歴史と現状を見つめるとともに、その時代に応じた運動を創造しているかどうかが問われている。空気を読むだけでなく、“滞っている空気”は破ることも必要なときがある。滞っている空気に遭遇した場合に、何に挑んでいくのが求められる。その意味で運動に参加することは勇気が問われることでもある。勇気とは、自ら進んで行動する意思のことである。

ルネッサンスの巨匠であるミケランジェロにこんな名言がある。

「最大の危機は、目標が高すぎて失敗することではなく、低すぎる目標を達成することだ。」

運動に共通する目標とは、人間を大切に作る社会像である。しかし組織・団体内でそうした基本目標が蔑ろにされる現実も少なくないのが実際である。

他者からの評価と“嫉妬”について、

運動や研究に関わる人間には、とくに政治的課題に深く関わるテーマには、“中立の立場”からさまざまな評価が陰で囁かれ、また公言されることがある。小グループや個人的な会話で交わされ、伝達されることもある。アクティビストを自覚する者にとって、それは現実であって、「正論」をいくら言っても、そういう人の心に届くことは少ないとあきらめたほうがいいときもある。あきらめるとは、仏教用語でいえば、明らかに見極めることである。関わりを放棄するのではなく、見究め、具体的なアプローチの方法を考えることに徹したい。

他者評価と自己評価はおうおうにしてズレることが多い。自己評価が高すぎても、当然だがズレる。そういうときは原理的にものごとを考えることに立ち戻ることが必要である。なぜこの運動にかかわっているのか、いまやっていることは何を本当のところまでざしているのか、誰のために何をしようとしているのか、ラジカルに（根源的に）考えてみる必要があるのではないかと感じている。

もうひとつの“嫉妬”は厄介である。運動のなかにいる人からの嫉妬はとくに厄介である。研究運動、労働（組合）運動、地域での運動などで生じることが少なくない。大学という研究と教育の場も生じやすい現実がある。嫉妬とは「自分よりすぐれている人をうらやみねたむこと」であるが、その内容は羨望と憎悪が

含まれる攻撃的な感情という面が大きい。

これは一方的な感情であるのだから、アプローチのしようがない。とどのつまりは、マイペースを崩さずに「自分が心を動かされたなにか」を大切に、悠然と運動をすすめるしかないのだというのが私の処世術である。そのほうが棘もなく、ふつうにやっていけるのではないかな。そもそも相手が私に嫉妬心を持っていると思うのは、自意識過剰の可能性がありますがもんね。

会議のやり取りと基本的運営

多くの会議に出席して学ぶことは多い。“人のふり見て、我がふり直せ”という諺があるが、会議での発言には人柄が出るし、その人の自己顕示欲的な姿勢が垣間見えるときがある。

また、疑問や異見を内心は持っていますが、ほとんど発言しない現実も少なくない。それは“沈黙の付度文化”といえるのではないか。必要なことは言い続ける主体者であることが求められている。会議と語りあいの文化をどうつくっていくのかもアクティビストの課題であると思っている。

アクティビストにとっては、会議はかなりの時間を生活のなかで占めるようになってくる。会議時間は短くて、能率のいい会議がいいに決まっているが、そのポイントをあげておきたい。会議運営の基本は、①原案のある会議、②みんなが発言して、合意が形成されることを大切にしている会議、③決めたことはみんなで行う決意の形成をはぐくむ会議、④お互いが敬意をもって会議に参加していること、などをあげておく。

“魚(鯛)は頭から腐る”(組織は上層部から腐りダメになっていく)という諺があるが、それをもっと詰めていくと、現実の課題に真摯に立ち向かう姿勢が乏しくなっていることである。さらにいうと、どのような原案を提案していくのかという、リーダー的立場にある人の真摯さと創造力が枯渇していることに辿りつくのである。高齢であることが必然的にそうしたちからを失っていくということではない。運動の目的を希求し続けていなければ、若くてもチャレンジ精神が乏しく、同じような状況に陥っていくことになる。そうした問題を持った人ほど役職にしがみつくと傾向があると感じている。これって偏見?!

4. 運動に参加する勇氣

世界陸連が主催する「ワールドアスレティックアワード2020(年間表彰)」の受賞者の中に、トミー・スミス、ジョン・カーロス、ピーター・ノーマンの3名の名前が記されている。1968年のメキシコオリンピック(前回の東京オリンピックの後の大会)の出来事で、私が高校生のときの記憶である。いずれも陸上男子200メートルのメダリストである。この出来事は、アフリカ系アメリカ人である

金メダリストのスマイスと銅メダリストのカーロスが表彰台の上で黒手袋を付けた拳を高くつきあげて、アメリカ国歌が流れるなか、アメリカ代表の2人は星条旗を見ることもなく頭は垂れたままであった。黒人差別を放置し強化されることさえある世界に向けた抗議であった。私は知らなかったが、拳をあげなかった銀メダリストのオーストラリアの白人選手のノーマンも、2人の行為に賛意を示すバッジを胸に付けて、顔をあげて表彰台に上がっていた。オーストラリアでも白人優先を掲げる「白豪主義」が当時は支配的であった。そうした時代の中での行動の一場面である。こうした行為はのちに「ブラックパワー・サリュート（称賛）」と呼ばれるようになる。

しかし当時の国際オリンピック委員会（IOC）は、神聖な表彰式を汚したとして、アメリカ代表選手の2人をオリンピックから永久追放することを決定していた。その後の3人の人生は悲惨を極めた。帰国したそれぞれには非難と中傷の嵐が襲ったのである。彼らに同調したノーマンに対しても「白豪主義」が襲いかかり、失意の日々を過ごすことになる。

この3名の元アスリートは、メキシコオリンピックから半世紀を経て、「ワールドアスレティックアワード2020」の会長賞に選ばれた。ここまで来るのに50年がかかったのだ。歴史は拓かれ、世界は動いていることに確信を持ちたい（2021年1月20日付「沖縄タイムス」「論考2021」安田絃一「差別に抵抗するアスリート」）。

1週間後の朝日新聞（2021年1月27日付朝刊）には、世界陸連が2020年12月、年間表彰式で3人に「会長賞」を贈った記事が載っている。受賞時、金メダリストのトミー・スマイスはこう語っている。「権利を勝ち取るために、アスリートたちが行動で示す番だった。早く走ることや勝利よりも大事なことがある」と。

銅メダリストのジョン・カーロスは、「人種差別を抗議するのであれば、たくさん予習をすることだ。社会にどんなことを持ち込むのかを予想し、どんな質問や挑戦が降りかかろうとも準備することが大切だ」。

遠田寛生記者（朝日新聞国際報道部）がこの記事のまとめを書いている。「私たちができることは何か。取材したアスリートの中で一番多かった意見は『子ども時代からの教育』だ。」そして女性教師の言葉を紹介している。「意見が合わなくてもいい。でも否定はいけない。互いに関心を持ち、傷つけない。こういう人がいると認め合うことが大事」ということである（2021年1月27日付「朝日新聞」スポーツ欄「差別はある だから私は」）。

50年前の出来事は私の映像的記憶に強く焼き付けられている。黒人差別の現実に対する「ブラックパワー・サリュート」の行動を。だがそれ以上に私が想い続けてきたことがある。オーストラリア人のピーター・ノーマンに対する誤解を抱いたままであったことである。50年前から、私（当時、高校生）はこの人はアフ

リカ系アメリカ人2人の行動にそっぽを向いたままだったという誤解であり、白人はこうした行動に同調するはずはないという偏見を抱いたままに50年暮らしてきたのである。一人ひとりの存在と意思を集団と共通項の中に押し込めて、事実を見ないで人間を分類化してきたのだ。思い込みの怖さである。人権を考え希求していくうえで大事なことは、一人ひとりの現実を見るもうひとつの視点である。50年間の偏見と思い込みが溶解したのは、学びによってである。子どもだけではなく、おとなや高齢者においても教育と学びは、人格形成のための必要不可欠なアクションである。

5. アクティビストであることの醍醐味

研究活動や社会運動に参加するなかで何度か“目から鱗（が落ちる）”体験があるのではなかろうか。

私が大学を卒業して、福祉分野の勉強をし直してみようと、気持ちを後押ししたのは、ボランティアサークルで重度の障がい児施設での泊まり込み体験が決定的であった。またパンの製造工場でアルバイトをしたときに、中卒と思われる少女たちが黙々と笑顔ひとつなく働いていた姿は、私の視覚的記憶のなかに刻み込まれている。

最も生き方と思想を揺さぶられたのは、哲学者で日本福祉大学の教員であった故・島田豊先生の講演を聴いたことであった。同氏の『現代の知識人』を読んで、講演会に参加したことで、日本福祉大学に入り直そうと考えた。3年次に編入し、福祉の基礎から勉強することにした。

専門ゼミは、賃金論の小島健司ゼミを選択した。福祉は経済学の知識が必要ではないかということと福祉分野でも労働運動が必要だと考えたことが理由だった。ゼミでは学生の意見を取り入れて、社会的注目の中にあつた社会福祉労働論をテーマに研究をした。小島先生（太田薫総評議長の時代に調査部長を歴任。1968年日本福祉大学教授。2002年定年退任、名誉教授）は当時、学監（実質的な学長職）を担っておられた。小島先生が「浅井君は卒業してどうしようと思っているのかな？」と聴かれたので、いろいろと迷っていることを話したら、「もう少し勉強をしてみたらどうか」ということで、大学院進学をすすめていただいた。人生の大きな転機であった。学部、大学院時代は本当に多くの本を読んだ。警備保障のガードマンのアルバイトでは、決められた業務以外の時間はほぼ読書ざんまいの時間を謳歌できたのだった。当時は学生アルバイトをだいじにしてくれる時代でもあった。

大学院は、社会福祉の歴史研究（イギリス社会福祉発達史）が専門の故・高島進先生のもとで勉強をした。東大卒業後、日本福祉大学一筋に尽力をされた方であった。私が定年間近になって着手した戦争孤児の戦後史研究は、恩師へのせめ

ても報告である。よく叱られた先生でもあった。原稿は手書きの時代で、修士論文の指導の際に、「あなたの『し』という字は『1』とどっちかわからないので、ちゃんと曲げて書かないと」と、ちょっといらだった感じで注意されたことをよく覚えている。「し」というひらがなを見て、そのときのことを思い出すことがある。亡くなる10年ほど前に、電話でお話した際に、「児童福祉とセクソロジーを専門分野にしています」と報告した際に、「それは日本では稀有な研究者だね」と言われたことを覚えている。それが1回だけの褒め言葉であったのかもしれない。

社会的な広がりのある運動に関わることの醍醐味についてまとめると、第1に、人間社会の現実を少しでも自分たちの努力で、人間を大切にする社会形成に主体的に関わること、さらに人権を踏みにじる政策や動きに抗って生きることを意味を実感することである。第2に、自分をも含めた人間のために生きることを喜びとする同じ志を抱く仲間たちとの出会いである。それが私の財産である。つくづく人に恵まれた人生であると思っている。第3として、自分との対話、思想（生き方の指針）を鍛えること、自己変革ほど楽しいことはない。それらが私にとって運動の魅力と喜びであると感じている。同時に、部分的には自己否定を含む自己との格闘という側面を持っている。自己変革を放棄したアクティビストは存在しない。

まとめにかえて―“コミ福らしさ”を問い続けて―

退職をした後も“コミ福らしさ”とは何かを自らに問うことがある。立教大学が「福祉」の理念を掲げたコミュニティ福祉学部を1998年に立ち上げた原点を想うのである。あえて粗雑なことばを使えば、お金にならない分野に足を踏み込んで、学部を創ってきた立教人の想いを退職したいまも受け継いでいきたいと想っている。

「コミュニティ福祉」という用語は、そこ（暮らしの場であるコミュニティ）に生きている人びとの現実を“愛”を携えて向かう姿勢のなかにあると思う。コミ福らしさは、人々に関心を持ち続けている真摯な姿勢のなかにあると思っている。そうした姿勢は、身近な仲間への態度で問われ、確かめられることがある。職場や研究団体、さまざまな仲間たちへの愛が問われると強く思っている。

キリスト教の宣教師が聖書の「愛」をどのように訳すのかを悩んだ末に、“大切（御大切）”と訳したとのことである（渡辺憲司『生きるために本当に大切なこと』角川文庫、2021年、229頁）。身近な仲間を大切にできない現実には、保身や付度、自己利益、名誉心、他者への嫉妬心などが混在していることが多い。そういう現実を自らは認識しないことに最大の落とし穴がある。あえていえば、意見がちがう人のことばに真摯に耳を傾けることが、コロナの時代にこそ求められ

ていると思うのだ。本当に人を大切にする姿のなかにコミ福らしさがあり、いままで以上に仲間を大切にする姿勢・態度のなかに、コミ福らしさを見出す努力を続けたいと思う。学生・院生、卒業生、教職員にコミ福の魂が息づいていると信じたい。

人間と人間集団はよい方向にも、わるい方向にも変わっていく存在なのだ。どのようなアクティビストであるのかを、自らに問い続けていきたいと心に刻んでいる。

この小稿を戦後76年目の敗戦記念日に投稿することにした。コミュニティ福祉学部で学び、教え、研究したすべての人たちが戦争という福死政策を見抜き、言うべきことを言い、抗い続けるアクティビストであることを信じるものである。